



開年遊華

田＝魚月

耕隨漫草

華筆錄紙

全全全全

(岡山製本)

大正四年一月廿四日印刷
大正四年一月廿七日發行

有朋堂文庫
閑田・年々・遊京・花月
(非賣品)

編輯兼
發行者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社工場

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

閑田耕筆四卷は伴蒿蹊の隨筆也。蒿蹊名は資芳、近江八幡の人、出でて京師に住し、其居を閑田廬と號し、自ら閑田子と稱せり。本書の名は即ち之に基く。蒿蹊古學を研究して遂に一家を爲し、蘆庵、澄月、慈延と相並びて平安の四天王と稱せられ、和歌文章を以て重きを一世に爲せり。

年々隨筆は、石原正明の筆述に係れる「辛酉上」「辛酉下」「壬戌」「癸亥」「甲子上」「甲子下」の六卷に加へたる總稱也。正明は尾張の人、蓬堂と號し、喜左衛門と稱す。始め本居宣長の門に入り、後塙保己一に師事せり。其典故に通じ、國學に造詣深く、自ら一家の見を立てて古學家流の固陋を難じたる事、本書の説く所に徴して知るべし。

遊京漫錄二卷は清水濱臣の著はす所、前半は専ら其西下の日録にして、下半は旅中の見聞を纂輯したる隨筆也。濱臣は通稱を玄長といひ、醫を以て業とし、江戸不忍池邊に住して、其廬を泊泊舎といひ、又月齋と號せり。村田春海に就きて古學を修め、業成りて子弟を教へ、歌文を以て覇を一代に唱へぬ。

花月草紙は、松平定信の隨筆にして、其文の遒勁にして而も典雅なる、隨筆文中罕に覩る所也。定信は白川の城主松平定邦の嗣、天明三年封を嗣ぎて越中守と稱し、同七年老中となり、侍從に任ぜられぬ。其治績の赫々として、徳化のよく下に及びたる事、寔に徳川治世三百年史中の盛觀と稱すべし。夙に學を好み、和歌を能くし、又畫に巧なり。文化九年致仕して樂翁と稱し、文政十二年七十二を以て卒す。

以上四書を收めて本篇を成すに當り、閑田耕筆、年々隨筆は流布の版本を底本とし、花月草紙は著者自筆の六冊本に據り、遊京漫錄は最も信賴するに足ると認めたる寫本と百家說林本とを對讐して其宜しきに従へり。假名遣を一定し、間々漢字を配し、句讀を施したる等、校訂上の一般方針は他の本文庫と異なる所なし。

本書の校訂校正に關しては椿強祐、星野亮太郎二氏の手を煩はしたる所多し。記して謝意を表す。

大正四年一月

校訂者 塚本哲三

目錄

閑田耕筆

一一二〇二

卷之一 天地部 三

卷之二 人部 六八

卷之三 物之部 一四

卷之四 事部 一四九

年々隨筆

二〇三—三八四

一 辛酉上 二〇三

二 辛酉下 二三五

三 壬戌 二五八

四 癸亥 二八九

五 甲子上 三三二

六 甲子下 三五二

遊京漫錄

三八五—四九二

卷之上 三八七

卷之下 四四一

花月草紙

四九三—六〇二

内容細目

閑田耕筆

ゆふづつの清濁	三
牛女交會の説	四
月の上弦下弦	四
文月	四
惠方のこと	五
右卦無卦	六
禮樂刑政	六
中華といふこと	六
日本の國風	七
腐儒	七
高官の人の刑罰	七
支那人の殘忍性	八
風習	九
西王母	一〇
國里の名の唱と文字と異	一〇
なるもの	一〇

事物地名の古訓	二
古語の轉	三
すがりといふ語	三
あは雪	三
はたけといふ詞	四
あさぢふのふといふ詞	五
杜といふ語	五
地名あまべの考	六
高山寺	六
秋篠の外山の里	六
滄海の變	六
吉野嵐山の櫻	九
小野といふ地名	一〇
政所君が畑	二
野路の篠原	三
名次山	三
清少納言の古墳	三
坪坂直好の蕎麥喰社の辨	四
柿本人麿の舊跡	五
近江八景	六
野寺	七

船木	六
栗栖野	六
大江山	元
玉の浦	三
佐比の里	三
素盞烏尊の舊跡	三
津島の渡り	三
在根良の訓	三
長門の浦	三
靜の巖屋	三
三河國の銅鐸	三
筑紫觀音寺の古壺	三
櫛稻田姫の舊跡	三
箸塚	六
坂上田村麿の塚	四〇
近江の古跡	四〇
同	四二
紀貫之の梁簡銘	四二
名所の國郡の違ひ	四四
位山	四六
越中國布勢の湖	四七

有情の草木	六
孝子	六
同	九
安心立命	一〇
男子化して女子と成る	一一
轆轤首	一二
神童	一三
才能の賣れ残り	一四
職人盡歌合の中の名目	一五
鉢叩	一六
弦ぞめ	一八
犬神人	一八
犬神つかひ	一九
穢多	二〇
聖門師	二〇
萬歳	二〇
同	二二
夙といふ種類	二三
酔人の本性	二三
馬の智	二四
犬の智	二五

猿の情	二六
馴れし熊	二六
奇獸異鳥	二七
同	二八
新奇を尊ぶ習俗	二九
飼鳥の情	三〇
あとといふ鳥	三〇
慈悲心鳥	三三
佛法僧といふ鳥	三四
雀の子	三六
雀の字	三六
和漢同物同名のもの	三六
合歡の字	三七
盧橘	三八
半倍	三九
新古今集中の祕歌	三三
なかたまの木	三三
もろちどり	三三
われからといふ虫	三三
しのぶ	三四
くもで	三四

槻弓	三五
武藏鎧	三五
和田一類の酒宴せし盃	三五
木綿	三七
海龜	三七
同	三八
龜の看經	三八
龜の尿	三八
鼈の怪	三九
畜類の長壽	四〇
はぶの智	四〇
章魚化して蛇となること	四二
植物化して動物となること	四二
と	四二
狐と稻荷明神	四二
近江國の正念寺に住める	四二
狐	四三
奇持得たる僧	四四
狐の怪	四六
天狗	四六
天狗と化したる僧	四八

虚も害なく實も益なき事	一四八
加茂祭の再興	一四九
近衛使の故實	一五〇
武家の禮式	一五〇
音律	一五〇
古樂	一五二
催馬樂	一五三
催馬樂の文字	一五三
内侍所の御神樂	一五四
舞	一五四
芝居といふ文字	一五四
能	一五五
田樂	一五五
横笛	一五五
博奕	一五六
飴賣の笛	一五七
相撲	一五七
蹴鞠	一五七
鞠場の植物	一五七
蹴鞠	一七〇
香の調度と茶具	一七〇

茶道	一七一
茶のわざの益	一七二
茶禮に心得がたき事	一七三
茶事を廢せしこと	一七三
猥褻なる和歌	一七四
戀歌	一七五
同	一七六
撰集に入ること	一七七
國歌の體裁	一七九
本性	一八一
儒教を詠ぜし歌	一八二
學ぶ道と教ふる禮	一八三
名歌曲	一八三
戰國時代の質素	一八四
墓	一八五
王家統の訓	一八六
古今集三條西家の祕本	一八六
とりかへばや物語の新舊	一八六
二本	一八六
男子の鐵漿染むること	一八七
肩衣袴	一八七

烏帽子	一八八
衣裳は禮の標示	一八九
謎語	一九〇
獨樂	一九一
懸想文	一九一
雪隱といふ語	一九二
けんすいの字	一九二
餅をからんといふこと	一九三
米をうちまきといふこと	一九三
甲冑の差別	一九四
血に泣くといふこと	一九四
咳の高きを自負といふこと	一九四
と	一九四
金龍道人の義茶亭	一九五
義の字義	一九五
義齒	一九五
辻の字	一九六
國字	一九六
祿の高	一九七
古の殿舎佛寺の廣大なり	一九八
しこと	一九八

年々随筆

神社の位階	一九八
がんぞうといふ語	一九九
での意義	一九九
本三位といふこと	一九九
小智は大道の敵	二〇〇
四少三安の養生	二〇〇
百如律師の法語	二〇〇
老年	二〇一
花	二〇三
月	二〇四
雪	二〇四
某州といふこと	二〇四
某陽といふこと	二〇五
鳴弦	二〇六
辛酉の年	二〇六
某鷹(丸)といふこと	二〇九
品川の莊居	二一〇
紅葉	二一一
上野	二一二

曉と夕	二二三
忌服	二二三
喪服	二二四
神事	二二四
汚穢	二二五
父母の喪	二二七
明法道	二二七
人の死穢	二二八
月水の穢	二二九
肉を食ふは穢なりや	二三〇
五辛食ふ事	二三三
随筆の姿	二三五
和漢のめでたき随筆	二三五
鹽尻	二三六
徒然草の批評	二三六
帽額	二三七
戀の順逆	二二九
戀せらるゝ人	二三〇
法師に戀すること	二三〇
百首百杯	二三二
散るぞめでたき	二三二

菫	二三二
こぶしの歌	二三三
はやしといふ語	二三三
詩經の文字遣	二三三
虚字	二三三
女の眉そる事	二三四
日野中納言資朝卿の日記	二三五
諡	二三五
同	二三六
時鳥	二三七
菊	二三八
紅葉	二三八
をかしといふ詞	二三八
ゐといふ詞	二四〇
居所に名づくること	二四二
唐土を尊ぶこと	二四三
國の稱號の正しきこと	二四四
公卿殿上人を王人と書く	二四五
こと	二四五
漢學の半可通	二四五
佛法の結夏	二四七

偏袒有肩	二四七
團子といふ字	二四八
漢語の四聲	二四八
四聲をさすこと	二四九
平上去と清濁	二五〇
古今の清濁の相違	二五一
點圖	二五二
俳諧師の洒落	二五四
われてといふ詞	二五四
名所の信僞	二五五
革命の運	二五六
官を賣らるゝ事	二五八
俗名	二六一
同	二六三
字つくること	二六四
院號	二六六
食物と色ごのみ	二七〇
鯛	二七〇
赤女といふ魚	二七〇
鯔魚	二七三
古人の名におへる魚	二七三

中臣鎌子連をカマスノム	二七三
ラジト訓むこと	二七三
赤えといふ魚	二七三
孔子の宣ひし周公といふこと	二七四
孝	二七五
山梁雌雉時哉々々	二七五
品川の旅住居のあはれ	二七六
五位を大夫とよぶこと	二八〇
公卿と殿上人	二八〇
上卿	二八一
百敷といふこと	二八一
あら玉といふこと	二八二
物の名の語原	二八四
本居宣長の古今集遠鏡	二八五
唐詩選の解	二八五
鮪と眞黒	二八六
うまき物	二八七
古の異母兄弟の結婚	二八九
同	二九〇
左衽	二九二

古冢を發く事	二九三
古の主殺しの例	二九四
古の親殺しの例	二九四
夕さればといふ詞	二九五
ヤボといふ詞	二九五
前栽	二九五
ひきはだといふ詞	二九五
ざりといふ詞	二九七
大口	二九七
學者の心得べき事	二九九
古今の變遷	三〇〇
肌見ゆるを恥ぢしこと	三〇一
かづき	三〇三
文身	三〇五
ばくちうち	三〇七
殿といふ詞	三二〇
麻疹	三二一
蛙をかへるといふこと	三二二
扇のかなめといふこと	三二三
堯舜之民比屋可封とい	三二三

ふこと	三二四
京都を洛陽長安といふこと	三二四
契沖が伊勢物語の解き方	三二五
相おひといふ詞	三二六
眞の注釋	三二六
さは姫と立田姫	三二六
重荷に小附	三二六
川おろしといふ詞	三二七
江家次第春日使の條の茶碗	三二七
前栽	三二八
上下の上のみを著ること	三二八
茶碗を磁器の通稱なりといふこと	三二八
平野社	三二九
人の實名を字音によぶ事	三三〇
結句といふ語	三三一
初春の景色	三三三
除日	三三三
ひも鏡	三三三

呼子鳥、いなおほせ鳥、百千鳥	三三四
和歌の子の日の題	三五五
枕詞	三五七
くれなるの考	三三八
むらさきの考	三三九
ときたへの考	三三〇
なつごろもの考	三三三
鳥獸の鳴聲	三三三
先王の意義	三三四
いろといふ衣	三三四
白小袖淺黄の上下著ること	三三五
文化といふ年號	三三五
元年	三三六
三合といふ災歲	三三七
石塔といふ祈禱のわざ	三三八
寺の十二月の修行	三三九
逆鱗口の箸	三四〇
應仁記の大事九ヶ條	三四〇
酒屋壺役	三四一

ふも山といふ詞	三四二
夕ぐれ、たそがれ、かはたれ時	三四二
夕さればといふ詞	三四二
下かき	三四二
詩經の周南關雎篇	三四三
詩經の周南樛木篇	三四四
樛木	三四四
古今集の序	三四五
小澤蘆庵の歌論と歌風	三四六
姑息の生活	三四七
花の節會	三四七
古事記の訓	三四九
學の研究	三五二
孔子の語	三五三
大人といふ詞	三五四
風呂	三五五
おこと汁	三五七
天子の語	三五七
切懸	三五八
板部	三五八

萩生茂卿の南留別志の駁	三五九
まみ穴	三五九
朝臣	三六〇
醫藥と呪禁	三六〇
和歌の縁の詞	三六一
和歌の第一義	三六四
諸大夫	三六五
同	三六八
敘留	三六八
參議	三六八
同	三七〇
冬籠	三七〇
夏籠	三七一
庇	三七一
鐘の音	三七二
千世萬代といふ詞	三七三
和歌に同心同字を思む事	三七三
古の池を作ること	三七三
鳥取造	三七五
大原女をおぼらめと訓む	三七五
こと	三七六

遊京漫錄

假名遣	三七六
音の清濁	三七九
妻の呼方	三八〇
奥様の逝去	三八一
品川	三七七
箱根	三七七
水心亭の記	三八八
興津	三八九
犬石の辭	三九〇
吉野	三九一
京都	三九一
鳴原	三九二
宇治川	三九四
琵琶湖	三九七
大阪	三九八
竹帙の宮の裏に記せる辭	三九八
竝長歌	四〇〇
伊勢	四〇一
二見の浦の長歌	四〇二

殘暑の辭	四〇二
三島	四〇五
疊翠軒の記	四〇六
千種侍從殿と歌會	四〇七
京都於圓山端之寮歌會	四〇九
本居太平の消息竝返し	四一一
伊勢山田錦江亭歌會	四一五
於伊勢山田豐崎文庫事	四一五
講釋	四一七
於伊勢山田世義寺樂會	四一八
伊勢松坂小津守良宅當座	四二二
送別の歌	四三一
大和宇智川の佛像	四四一
溫泉寺の法華經	四四二
萬葉集莫囂圓隣解	四四二
縣居翁贈辨子文	四四三
眞字平家物語	四四四
常明寺兼行の書	四四五
行基式目	四四五
萬葉五卷抄	四四八
蓮加上人の子守歌	四四九

古抄本三十六人集	四五三
豊崎文庫の尙書	四五三
和名抄の古抄本	四五四
荒木田麗女著述書目	四五七
祇園の執行日記	四五六
類聚名義抄	四五六
石川年足朝臣の暮誌	四六二
養和のみかどのあやしの	

傳	四七〇
皇子の御いみな	四七三
大洲の大男	四七三
難波の夜發	四七六
大湊の烈女	四七七
多田の奇童	四八二
酒賣る媼	四八五
白髮畑の恠	四八六
西扇屋の花紫	四九〇

花月草紙

花のこと	四九七
月のこと	四九八

船をしるること	四九九
天に任すること	五〇〇
女のふり	五〇〇
好惡の事	五〇〇
忠孝	五〇一
詞どがめ	五〇一
學問	五〇二
晴雨のこと	五〇二
醫師の先見	五〇三
古の醫師の道	五〇三
人麿が歌	五〇四
樂のこと	五〇四
後のうばさ	五〇五
老いたる人	五〇五
佛の教	五〇七
筆のこと	五〇七
みやび	五〇八
記臆	五〇九
えぞの咄	五一〇
色紙釜	五一〇
大和歌	五一一

淺草の市	五一一
水滸	五一一
邦道のこと	五一一
志と智	五一一
軍の道	五一四
雨	五一六
一種の熱病	五一九
文の事	五二〇
理外の事	五二〇
神佛の事	五二〇
與市の事	五二三
つくり庭	五二三
劔難の相	五二四
兵の道	五二四
賢に任ず	五二五
理屈	五二五
悟道	五二六
諫のこと	五二六
憂國の語	五二六
心の誠	五二七
聖人の樂	五二七

甲冑	五二八
學問の事	五三〇
不虞の備	五三一
小松内府	五三三
酒色	五三三
藥のこと	五三三
齒牙のこと	五三三
傍見の説	五三四
詠歌	五三四
忠孝の論	五三四
花の雨風	五三五
揚火のこと	五三五
戸富み家足る	五三六
皮肉の挨拶	五三六
子を愛す	五三六
神人のこと	五三七
酒つくる水	五三七
漂流の人	五三七
耳のちかきこと	五三八
人を評すること	五三九
遠慮遠謀	五三九

めづらしき好	五四〇
觀相	五四〇
こがねを好む事	五四一
大名の物語	五四一
和歌の教	五四二
狄仁傑の心	五四二
禍をうながす事	五四三
補藥	五四三
禪學	五四四
日金の眺望	五四四
餘地のこと	五四五
盲人	五四五
貴人の旅	五四五
觀相の論	五四六
降伏の勅額	五四七
蟲の名	五四八
かつみ	五四八
顯微鏡	五五〇
醫師の術	五五〇
引のばす癖	五五一
無遠慮のこと	五五一

猫の忠	五五二
狐の愚	五五三
茶の事	五五三
歌の評	五五四
禪意	五五五
米の値	五五七
農夫の風習	五五九
人をせむる事	五六〇
昔のこと	五六〇
性の善	五六一
唐のこと	五六一
水嵩そふ里	五六一
老農のこと	五六二
産農のこと	五六三
西風	五六四
日新	五六四
客嚮	五六五
書まれぶこと	五六五
薦の子	五六六
老衰の事	五六六
交友の道	五六七

落花のこと	五八八
蛸薬師	五八八
久病	五八九
庭づくり	五八九
花を蓄ふること	五七〇
秋の嵐	五七一
晴雨のこと	五七二
畫の事	五七二
源語の深意	五七三
蠻書のこと	五七三
人の勢ひ	五七五
雨風の事	五七六
かたちの教	五七六
利害	五七七
心を用ふること	五七七
醫師の心得	五七八
治療のこと	五八〇
落葉の風	五八〇
禍福	五八一
或山里	五八二
老鯉	五八三

寢覺の床	五八四
前驅	五八五
仙人	五八五
今参り	五八六
源語の評	五八七
藤花	五八八
山吹	五八九
八幡祭	五八九
人をしること	五九〇
國體	五九〇
世々のふり	五九一
上下のつかさ	五九一
民力	五九一
兩頭の蛇	五九二
政をなす事	五九三
古歌の事	五九三
膽を練る事	五九四
瞳子の事	五九四
費といふ事	五九四
病のおこる事	五九五
夫婦の道	五九六

内容細目終

鷹の蟲	五九六
醫師の道	五九七
天人一理	五九七
和尚の評	五九八
人の心	五九八
人の評	五九九
花月の遊	五九九